

平成二十八年夏の收穫

七「通俗 國民の日本史」（上下）

（有宏社、大正十五年増訂第七版（初版は大正十四年）、各特價四圓貳拾錢、合計二二二二頁）

文學士廣野藤吉の著作。芳賀矢一先生序に曰く、『國民教育の大部分は國史の教育に外ならぬ。國史を除いての部分は寧ろ世界共通である。』と。大町桂月先生序に曰く、『現代の國民は祖先以来の精神を承け續きて之を子々孫々に傳へざるべからず。譬へば連鎖中の一環の如し。』『あはや列強に分割せられんとしつつある所の支那は、畢竟するに個々分立して國民としての連鎖なきに基づく。即ち國民の歴史なきに基づく。』と。

同著者の「二千六百年史」と重複感はあれど、愛すべき體裁なり。

八「學界新風景」大塚虎雄著

（天人社、昭和五年刊、定價一圓八十錢。二六七頁）

昭和二年に東京日日新聞に連載せられ天下の喝采を博したるものといふ。たとへば、國語學の山田孝雄博士（東北帝大教授）につきては、『氏は奈良縣あたりで中學の教師をしてゐた。誰か漢文の免狀を取つて下さらぬかと教員會議の場で校長先生は老眼をしばたいた。よろしい、やりませうと買つて出たのが山田孝雄教師だった。翌年山田氏は漢文の免狀をもつて歸つて來た。そんな風にして、修身も地理も博物も數學さへもやたらに免狀をとつて來て、十指を屈するほどになった。』と。また、平泉澄博士につきては、『國史學の新星として東大助教平泉澄博士は近頃あざやかな光輝を放ち出した。三十を四つ五つ出た若さで文學博士にもなり、上品で瀟灑な姿を講壇に運んでお得意の中世に於ける精神生活や社寺運動史などを明晰な口調で説いてゆくあたり、古文書ばかり漁つてゐる國史の畑におくのは惜しいやうな氣がする人だ』と。

當時の學者の一面を活寫し、興味盡きず。

九「日露戰役 忠烈詩集 乾」

（改造社、昭和十三年刊、定價二圓三十錢。三五七頁）

陸軍大將荒木貞夫題字、團野宗勝編纂。はしがきによらば、書寫以來三十五年ぶりの出版なりとぞ。たとへば、廣瀬武夫の「扶桑艦上作」。『扶桑に生れて、扶桑に死す。一死國に報ゆ、七たび生じて皇を護らん』。同「福井丸舷頭作」。『七生報國、一死志堅し。再び成功を期す、笑みを含んで船に上る。』

今は全く評価せられざる時世なるも、當時の時代の緊張したる空氣をば感ぜしむ。

十「妖怪談義」柳田國男著

（修道社現代選書、昭和三十一年初版（昭和三十二年三版）、定價二二〇圓。二五二頁）

柳田先生曰く、『化け物の話を出るだけ生眞面目に又存分にしてみたし。蓋し我々の文化閱歷のうちにて近年最も閑却せられたる部面にて、従つて或る民族が新たに自己反省を企つる際に、特に意外なる多くの暗示を供與する資源なれば也』と。

十一「日本隨筆大成 第二期十五」

（吉川弘文館、昭和四十九年刊、定價二二〇〇圓。四一三頁）

文語百撰にある荻生徂徠「南留別志」を収録したれば、以前より永らく探し求めたるものなり。古書

價格二百圓は安し。ほかに可成三註、非なるべし、南留別志の辯、あるべし、ざるべし等を併せ収録す。

附記 古書展（ぐろりや會）

平成二十八年八月、東京古書會館古書展（ぐろりや會）に赴く。收穫品は以下の通り。

一、「神皇正統記、讀史餘論、山陽史論」

（有朋堂文庫、大正三年刊、非賣品。七九〇頁）

麗和中學四年修了、東京商科大學入學、岩井良太郎氏により大正九年に圖書館に寄贈せられたる旨墨書あり。

緒言に曰く、『我が古來の史論中、其白眉を以て目すべきものは、神皇正統記、讀史餘論、及び賴氏の諸論文なること、蓋し諸史家の齊しく認むる處なるべし』と。

有朋堂文庫に此の書あるは知らざりしかば、直ちに購入す。特に山陽史論（日本外史の論纂部分）あるは便利。

二、「ノート學庸」重田蘭溪著

（朝野書店、大正七年七版（初版は明治四十三年）、定價金四拾錢。一一〇頁）

天金。袖珍版の大學・中庸の解説書。

重田先生曰く、「大學の篇は孔家の傳へ遺せし書にして、初學の者の徳を行ふことの入口にてあるなり。家に入るには門よりする如く、徳をなすにはこの大學によらねばならぬなり。」と。

既に「ノート四書」は所有し、その中に本書の内容は含まれるとはいへ、今回の書は携帯用に向く。

三、「三大家の新修養」

（矢野博信書房、大正九年刊、定價金壹圓四拾錢。）

三大家とは、文學博士三宅雪嶺、侯爵大隈重信、子爵澁澤榮一を指す。

印刷、製本は稍粗末なれど、内容は豐穰なり。

冒頭は三宅雪嶺、一八一頁。（世界の革新へ、人は見かけ倒したる勿れ、自由自獻の精神、天性の發達好きと嫌ひ、米國の發展を目標とせよ、など）

雪嶺格言より、『人は何かに驚かされると注意して其のものを觀る氣になり、注意して觀れば更に進んで其れに就て考へる氣になるものだ。これが觀察と推理との生ずる所以である』と。

次いで大隈重信、一九〇頁。（現代國民訓、日本國民の發展と今後向ふべき針路、勞働問題に就て、など）

最後は澁澤榮一、一九七頁。（勞働問題解決の一端、協同的精神の發揮、新富豪訓、天運と人の和、人の世に處するに中庸を逸する勿れ、など）

四、「百年記念 賴山陽先生 完」木崎好尙著

（廣島縣廳内賴山陽先生遺蹟顯彰會、昭和八年増補再版（初版は昭和六年）。本文二七八頁）

山陽歿す天保三年（一八三二）。百年祭は昭和六年（一九三一）、「賴山陽全書」記念刊行に併せ、非賣品として制作の天金函入の豪華本なるらむ定價なし。

内容は、①外史と政記、②入京前後の経緯、③晩期に入りて、④學風と人物、⑤人間賴山陽、⑥逸話の修正、⑦賴門の諸名家、より成る。廣島縣廳、知事と賴山陽との緊密なる關係に興味をば感ず。

五、「隨筆賴山陽 改訂決定版」市島謙吉著

(翰墨同好會南有書院發兌、昭和十一年刊、定價金參圓。六一三頁)

初版は大正十四年。「山陽の生活」、「山陽の文藝」、「山陽の趣味」、「山陽と諸家」、「山陽の雑事」、「山陽の遺跡を訪ふ」、「追録」、「補遺」より成る。卷末に和田萬吉、坪内逍遙両氏の跋あり。

賴山陽を研究する者にとりて必讀の書とこそ覺ゆれ。